

都道府県・ 指定都市番号	25	都道府県・ 指定都市名	滋賀県	研究課題番号・校種名	3 (4) 小学校
				領域名	E S D
研究課題	<p>学習指導要領の実施を踏まえた、学校全体での教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究</p> <p>(4) E S Dを学校全体で体系的に推進するために、各教科等の連携により、持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を児童生徒に身に付けさせるための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究</p>				
指定年度	平成 27 年度～平成 28 年度				
学校名 (児童・生徒数)	<small>ふりがな</small> <small>しがけんひこねしりつじょうせいしょうがっこう</small> 滋賀県彦根市立城西小学校 (418人)				
所在地 (電話番号)	滋賀県彦根市本町3丁目3-22 (0749-22-7613)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.jyosei-hiko.ed.jp/				
研究のキーワード	<ul style="list-style-type: none"> ・地域教材と学びへの意欲 ・ E S Dの視点に基づく評価 ・思考力を高めるために ・実践力の育成 				
研究結果のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域教材の開発により、子供たちの意欲を高めたり、地域とのつながりを深めたりしながら、主体的、協働的な学びを促進することができた。 ○ 思考ツールの活用により、個々の子供が収集した情報や自分の考えを可視化したり操作したりすることができ、協働的な学びに結び付けることができた。 ○ 学習を基に、子供たちがより地域に関心をもって行動したり、自主的に働きかけを行ったりするなど実践力の育成を図ることができた。 ○ E S Dの視点を意識した評価規準を作成し、ルーブリックを用いた評価手法を取り入れることにより、学習の中で育成する能力を明確にして指導を進めることができた。 				

1 研究主題等

(1) 研究主題

世界に目を向け、豊かなつながりの中で、未来にたくましく生きる子どもの育成

『 Think Globally Act Locally 』

(2) 研究主題設定の理由

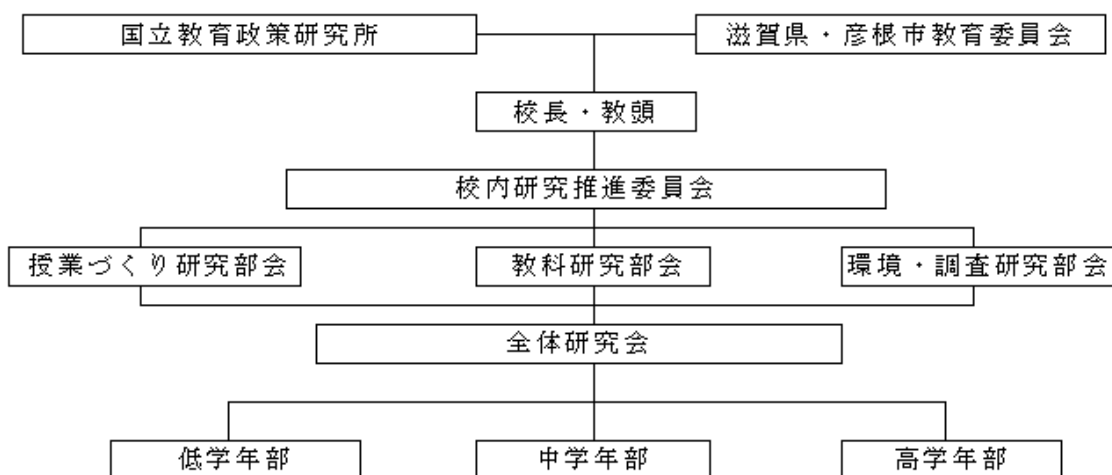
21世紀は、「知識基盤社会」と言われ、従来の教科内容の基礎的な知識はもとより、将来、学びたいことや探究したいことを見つけて自ら取り組む力、さらに解決しなければならない課題に直面したときに、様々な人々と関わりながら、よりよい社会づくりに向けて、自ら学び、自ら考え、判断し行動していく力が必要になってくる。

そこで本校では、まず総合的な学習の時間を中心に、城西小学校E S Dカリキュラム (E S Dカレンダー、授業改善、評価を含む) を構築する。このことを通して、探究活動に主体的に取り組み、E S Dの視点に立って物事を判断し、その成果を積極的に発信できるための力を子供たちに身に付けさせたい

と考える。具体的に子供たちに必要な力を、①学びへの意欲 ②思考力・判断力・表現力 ③実践力の3つとし、持続可能な社会づくりの担い手の基礎力の育成に向けて本研究主題を設定した。

(3) 研究体制

校内に研究推進委員会を設置し、研究主任をはじめ、校長、教頭、教務、各学年部からの研究推進委員で組織する。また、生活科・総合的な学習の時間を中心としてE S D教育を推進する授業づくり部会と各教科のE S D教育を推進する教科部会、学習環境や子供の姿から授業に生かす環境・調査部会との3部会を組織し、教科、総合両面でE S D教育の在り方を探っていく。



(4) 2年間の主な取組

平成27年度	・ 5月11・14日 研究推進委員会・研究構想の共通理解 講師：滋賀県立大学 木村裕先生
	・ 6月1日 全体会 評価規準作成の研修 講師：滋賀県立大学 木村裕先生
	・ 7月1日 授業研究会 5年「感じようびわ湖 見つけよう私たちの暮らし」
	・ 夏季休業中 評価規準検討・E S Dカレンダー見直し・総合的な学習の時間年間計画見直し
	・ 10月14日 授業研究会 3年「こんなキャッスルロードになったらいいな ～笑顔いっぱい夢いっぱいの町を作ろう～」
	・ 11月9日 授業研究会 6年「直弼公の生き方に学ぶ」
	・ 11月11日 授業研究会 1年「秋のフェスティバルを開こう」
平成28年度	・ 11月25日 授業研究会 2年「うごく うごく わたしのおもちゃ」
	・ 1月15日 授業研究会 4年「彦根城ちびっこマスター ～城下町のひみつをさがろう～」
	・ 4月18日 研究推進委員会 研究構想、計画、組織の立案
	・ 4月20日 全体会 今年度の研究の方向性について 講師：奈良教育大学 赤沢早人先生
	・ 5月31日 授業研究会 4年「彦根城のひみつを探ろう」
	・ 6月8日 授業研究会 2年「ドキドキ わくわく まちたんけん」
	・ 6月29日 授業研究会 5年「感じようびわ湖 見つけよう私たちの暮らし」
	・ 夏季休業中 学年部・部会ごとの話し合い、研究発表会に向けた指導案作成・指導案検討
	・ 10月5日 全体会 研究の進め方・研究発表会に向けて 講師：目白大学 多田孝志先生
	・ 10月19日 授業研究会 3年「こんなキャッスルロードになったらいいな」
	・ 10月26日 授業研究会 1年「たのしいあきいっぱい」
・ 11月2日 授業研究会 6年「直弼公の生き方に学ぶ」	
・ 11月25日 研究発表会 記念講演：目白大学 多田孝志先生	

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

- ①学びへの意欲を高める地域教材，学習活動の開発
 - ・地域の特色を生かした学習素材の開発を図る。
 - ・調査活動，体験活動，人や社会とのつながりを実感できる活動を充実させる。
- ②思考力を高める場の設定と思考ツールの活用
 - ・主体的・協働的な学びを重視した授業改善を図る。
 - ・思考ツールを用いた話し合い活動を充実させる。
- ③地域の特色を生かした実践力を発揮する場の設定
 - ・子供たち自身が実際に地域で行動したり，関わったりする場を設定する。
 - ・学んだ成果をもとに，友だち・保護者・地域・社会に働きかける力の育成を図る。
- ④E S Dの視点に基づく評価規準と評価方法の開発
 - ・生活科・総合的な学習の時間の評価規準をE S Dの視点で捉え直し，授業実践の中で生かす。
 - ・ルーブリックを用いた評価手法を活用し，能力育成を重視した評価基準の作成を図る。

(2) 具体的な研究活動

- ①学びへの意欲を高める地域教材，学習活動の開発
 - ・子供たちが学びを主体的に進めるために，学習対象や内容が子供たち自身の生活に身近なもの，関わりがあるものが効果的であると考え。そこで，歴史・文化遺産，環境保全，国際理解を学習の対象としながら，地域商店街の町づくり，国宝彦根城と城下町，城山，地域出身の井伊直弼公を中心として，教材開発を進めてきた。
 - ・学習過程では，子供たち自身が自ら調査を行ったり，体験をしたりする活動を意図的に仕組むようにしてきた。また子供たちと地域社会とのつながりを大切にし，子供たちの学習がより活性化し，探究的になるように地域の人材活用を推進しながら，学習の場を整えるようにしてきた。
- ②思考力を高める場の設定と思考ツールの活用
 - ・子供たちの思考力を高めるために，学習展開の中で，思考する場面を意図的に設定する。さらに，学びの必然性が生まれる課題を提示しながら，様々な場面で思考ツールを活用し子供たちが協働的に学び合う学習展開を図った。
- ③地域の特色を生かした実践力を発揮する場の設定
 - ・地域の方や観光客と関わったり，町のよさや問題点に目を向けたりしながら，地域につながり地域で行動できる場の設定を図ってきた。
 - ・子供たちの学んだ成果を，友だち，保護者，地域，社会に向けて発信する場を設定し，自ら社会と関わる態度を意図的に養うようにした。
- ④E S Dの視点に基づく評価規準と評価方法の開発
 - ・従来作成していた生活科・総合的な学習の時間での評価規準をもとに，E S Dでつけた4つの力，3つの態度をクロスさせ，新たに城西小スタンダード評価規準の作成を行った。
 - ・スタンダード評価規準をもとに，各学年の内容に沿った評価規準，またそれに準じたルーブリックを作成し，学習全体をE S Dの視点で捉え，児童の能力，態度の育成を図った。

3 研究の結果と今後の取組

(1) 研究の結果

- 地域の人やもの、事柄を地域の限りある財産「宝」として捉えることで、地域に愛着をもち、自分たちとのつながりを感じながら意欲的に学習に取り組むことができた。また、専門機関との連携やゲストティーチャーの活用で、充実した体験活動や探究的な学習を展開することができた。
- 目的意識や相手意識を明確にしたり、学びの必然性をもたせたりする資料の提示や学習課題を設定することで、子供たちが主体的に活動することができた。また、付箋を用いたK J法やピラミッド図等、思考ツールを活用したことにより、個々が集めた情報を可視化することができ、子供たちがその情報を動かしたり付け加えたりすることを通して、他者と協力したり、多面的・総合的に考えたり、コミュニケーションを行ったりして、協働的な学びを展開させることができた。
- 学びの成果を、地域へ向けて発信する機会を設けたり、地域のために自分たちにできることを考えて行動する活動を設定したりすることを通して、子供たちの地域への関心が高まり、地域へ働きかける活動が充実してきている。
- E S Dの視点をクロスさせたスタンダード評価規準をもとに、各学年で学習単元の評価規準を作成することにより、指導者が学習を計画し実践する時、E S Dの視点を意識し学習を構成することができるようになった。またそれぞれの能力・態度に関して、学年の系統性を意識し、その育成を図る活動を展開させることができた。
- ルーブリックを作成し活用することで、一般的で客観的な評価を可能にし、更に思考力や表現力など見えにくい力を見える形にすることができた。また、目指す子供の姿をイメージすることもでき、子供の学びの質を見取っていくために有効であることがわかった。

(2) 今後の取組

- 対話的な学びを更に進めるための授業改善（生活科や総合的な学習の時間、各教科）

自らの考えを広げ、深めるための対話的な学びを進め、臆することなく自分の考えを相手（友だちや地域の人、観光客など）に伝えられるようにする。そのために、各教科の授業改善に取り組み、学習課題の設定を工夫し、思考ツールやグループ学習を効果的に活用していく。
- 総合的な学習の時間と他教科との往還を意識したカリキュラム・マネジメント（E S Dカレンダーの見直しと充実）

E S Dカレンダーの作成により、総合的な学習の時間と各教科等とのつながりが見えてきた。今後も毎年見直すとともに改善することを通して、E S Dの視点から総合的な学習の時間と各教科等との往還的關係を図りながら、それぞれで培った力を相互に関連づけて伸ばしていけるようにしていく。
- 探究的な学びの過程における深い学びの実現のためのプランニング

アクティブ・ラーニングの視点から、授業構成について見直しを繰り返し、より深く探究する授業となるよう「授業の質」を高めていく。また、育成する能力を明確にするとともに、学習プロセスの中で、思考・判断・表現する場面を効果的に設定し、主体的に問題解決を図っていけるようにする。学習を通して子供たちの学びの変容を的確に捉えられるよう意識し、実践を重ねていきたい。
- 学習プロセスに応じた効果的なルーブリック評価の作成と有効活用

評価の場面で使用するだけでなく、学習活動を通してつきたい力を明確にし、そのための具体的な手立てや支援を考え、授業づくりに生かしていくようにする。生活科や総合的な学習の時間だけでなく、各教科でも学習プロセスごとに重点項目を決め、効果的・効率的に評価できるようにしていきたい。